

20260303 県立広島大 七田良彦

今回は、モゴール族探検記（梅棹忠夫著作集 第4巻 中洋の国ぐに）のご紹介です

前回、日本探検（第7巻）でご紹介した梅棹忠夫（1920-2010：国立民族博物館創設者、文化勲章受章者）は、1955年夏、京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊

の一員としてアフガニスタンに赴き、西ヒンズークシ山中に住むモゴール族（*1）と呼ばれる人々の村に住み込んで、調査研究を行っております。

帰国後に旅行記を執筆する約束があり 1956年9月、梅棹は、岩波新書の一冊として‘モゴール族探検記‘を刊行。

（フランス文学の大家、京都大学教授 桑原武夫（1904-1988：文化勲章受章者）が岩波書店との仲介の労を取られた由）

この岩波新書、版を重ね（1993年時点で33刷）、一部は中学校や高等学校の教科書に採録されたそうです。

（今でも教科書に掲載されているのでしょうか）

梅棹は、自分自身が人類の一員でありながら、人類の他のメンバーについて、しばしば意外なほど、ものを知らない、と書いております。

風俗・習慣・ものの考え方の違う人たちの中に入っていて、うまく仕事を進めるのは、なかなか難しいものだ。言語が違い、宗教が異なると、ますます厄介なことになる。

そういう人たちとどんな接触の仕方をすれば良いか、理論、観念、善意で片付く問題では無い、具体的な経験の蓄積が必要なのだ。

そういう事を考え、京大学術探検隊が経験した実例を成功も失敗も記しておくことにした、アジアに対する新しい働きかけを見出していくには、

この種の蓄積がものいうのではないだろうか、と書いています。

梅棹がアフガニスタン各地を探検して（*2）約70年の歳月が流れておりますが、私たちは、どれほど、アジアの民衆にたいする知見を積み上げたのか（梅棹忠夫的に言えば、ものを知ったのか）、という事を考えさせる機会にな

る本でもあります。

この学術探検隊に同行されたカブール大学アーマッド・アリ・モタメディ氏（通訳兼リエゾンオフィサー）は、その後、米国ミシガン大学に留学、そこで日本人女性と知り合い結婚。

アフガニスタン国立博物館の館長を務めました。1979年ソ連軍のアフガニスタン侵攻に際し、ご家族（夫人と二人のお子さん）は、日本に避難、彼は国内に残留、その後のモタメディ氏の消息は

耳にしていないとあります（モゴール族探検記、追記2より）。

また京都大学学術探検隊と同じ時期、二人の米国人学者（ドイツ系米国人：シュルマン博士（歴史学）、シュラウアー氏（人類学））が、ドイツからフォルクスワーゲンに乗り、

陸路でアフガニスタンに入り、そのワーゲン（空冷エンジンで砂漠に強い等）を駆使して、アフガニスタン各地でモゴール族調査しております。

現地（ゴラート地方のタイワラ地区）でワーゲンに乗った米国人学者二人と京大探検隊（梅棹）が遭遇する件も、この本の中に出て参ります。

梅棹は、1か月を超えるモゴール族探検を終えカブールに戻り（ヘラートから北回りのルート使う事で、アフガニスタンを一周）そこで京大探検隊と別れます。

1955年10月9日から、二人の米国人学者達（タイワラで出会った）と一緒にカブールからフォルクスワーゲンに乗ってカイバル峠を越えてパキスタンに入り、

更にインドのカルカッタまでのワーゲンの旅を続けカルカッタでインド亜大陸横断の長い旅を終えております（到着は、10月17日）。

この間、梅棹は、移動するワーゲンの中で、二人の学者と意見交換等をしながら、また持参したローマ字タイプライターを駆使して、持参したカードに、

様々な旅行記録や日記の纏めております。移動するクルマの中でのデータ作成

経験やアフガニスタン各地（ゴラート地方他）での日々のデータ採集の作業等が、

ロングセラー 知的生産の方法 岩波新書 1969年第1刷（2019年現在 第99刷）の論稿を生み出す原体験でもあったようです。

アフガニスタンでのモゴール族探検の経験、更にカブールからカイバル峠を越え、パキスタン、インド、旅の最後に西ベンガル州のカリンポンに足を延ばしカンチェンジュンガ（8586 ㊦：世界第三位）を眺める旅は、梅棹に中洋という概念（西洋と東洋の間の国々を指す言葉）に気づかせたようです。

後年、文明の生態史観 1974年初版（2011年3月 改版9刷）中公新書を生み出す契機となった旅でもあります。

何やら、司馬遼太郎の街道を行く を思い出させるところもあり、ご一読、お薦めの本（モゴール族探検記）です。

今回は、梅棹忠夫の名著、文明の生態史観 を巡る物語（梅棹忠夫著作集 第5巻 比較文明学研究）をご紹介できれば、と思う次第です。

* 1 20世紀初頭、フィンランドの言語学者（ラムステット）が、ロシア領内を旅行した折、アフガニスタンとの国境に近いクシカの町で

モゴールと名乗る2人の男に出会い、その言葉を採集、1906年に言語資料（MOGHLICA）を発表。

アフガニスタン奥地（ゴラート地方）に、13世紀に東から攻め込んだチングスハーン末裔が住んでいて、今もモンゴル語（モゴール語）を使っているという事実が、世界の学会を驚かせた。

それから50年（1955年当時）、この箱をこじ開けようという人が、今回のヒンズークシ・カラコルム学術探検隊人類班のメンバーである

13世紀の中世モンゴル史の専門家、京都大岩村忍教授（1905－1988）。（岩村教授は、1954年に米国シュルマン博士とアフガニスタンにて予備調査実施）

尚、梅棹は、1944年5月から45年8月まで蒙古自治邦政府所在地（当

時) の張家口にある西北研究所に今西錦司 (1902-1992 : 文化勲章受章者) と共に勤務、

現地でモンゴル牧畜に関わる研究に従事、モンゴル語、乗馬を習得しております。

* 2 梅棹は、1955年夏、パキスタンのカラチからクエッタに鉄道で移動、そこから車で国境を越えカンダハールに入りモゴールの関連情報を集める。

その後、カブールにある日本商社 (関西系商社の江商 : のちの兼松江商) バンガローに滞在。遅れてカブールに到着した、岩松教授 (東西交渉史)、岡崎敬 (考古学者)、

と山崎忠 (言語学者)、梅棹忠夫 (人類学・生態学)、中村誠二カメラマン、アフガニスタン人の通訳兼リエゾン・オフィサーの5人からなる人類学班を組成。

アフガニスタン南部カンダハールを經由、西部のヘラートに入る。そこからハリ・ルード (河) 沿いのゴラート地方の奥地に入り、世界最悪の道路 (梅棹曰く) を通り、

シャーラックを経てモゴール族を探す旅を始めております。タイワラから荷駄を載せた馬の隊列 (キャラバン) を組み、いくつもの峠 (3000 呎) を越え、モゴール族の村、ジルニーに入り込み、

その地に (標高 4139m のザンキ・マザール連峰の山麓)、山崎、梅棹の2名が7月末から8月末まで1カ月滞在 (岩村、岡崎の両名はジルニーから別の目的地に移動)。

同地で山崎忠博士 (モンゴル語の専門家、天理大教授 : 残念ながら 1956年テヘランにて急死) と一緒に、モゴール語を採集や、モゴール族の人々の暮らし等を子細に観察されております。

同行した岡崎カメラマンによる写真集や映画カラコルムが、探検隊帰国後に日本で公開され、大人気だったということではありますが、現在、ネット経由でもその動画が見ることができないようで、

(映画のポスターは検索可能) 残念であります。

以上